

近代日本版画家名覧 (1900—1945)

〈凡 例〉

- 1、作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。
- 2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外は一般的と思われる読みを採用した。
- 3、年記は西暦を基本として、生没年については（ ）内に元号を表記した。
- 4、作品名は《 》、書籍・雑誌・作品集などは『 』内に表記した。〔 〕内は執筆者補記を示す。
- 5、版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。
- 6、類出する参考文献については以下のように表記する。
 - ・加治幸子編著『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版 2008年）→『創作版画誌の系譜』
 - ・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版 1991年）→『エッチング』
- 7、執筆者

岩切信一郎	（元新渡戸文化短期大学教授）	植野比佐見	（和歌山県立近代美術館学芸員）
加治幸子	（元東京都美術館図書室司書）	河野 実	（鹿沼市立川上澄生美術館館長）
滝沢恭司	（町田市立国際版画美術館学芸員）	西山純子	（千葉市美術館学芸員）
三木哲夫	（兵庫陶芸美術館館長）	森 登	（学藝書院）
樋口良一	（版画堂）		

戦前に版画を制作した作家たち (19)

【ひ】

東 丘児 (ひがし・きゅうじ)

中島重太郎主宰の創作版画倶楽部が発行した『版画 CLUB』第1年第3号(1929.6)のCLUB紙上展第1回に《グラス》が入賞。「甲」無しの「乙」3点のうちに選ばれる。選者恩地孝四郎は「余り上作とは云へないが」としている一方で、「まつくろのなかに、鋭く浮くグラスを試みたところを面白いと思った。」として良い点を指摘した後、「何しろコップーツで美を射とめやうといふ手品だ、もっと周密に心を働かして頂きたかつた」とアドバイスを記している。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

東 林 (ひがし・はやし)

大分県師範学校の図画教師武藤完一が版画講習会を契機に発行した版画同人誌『彫りと摺り』(1931～1933)の第2号(1931.11)に《秋晴れ》、第3号(1932.1)に《勅題》、第6号(1932.12)に《大阪城》を発表。《秋晴れ》のサイン「H. H.」から姓名の読みを「ひがし・はやし」とした。当時、東は武藤完一と同じ大分県師範学校に勤務。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1(2002.9)／『創作版画誌の系譜』(加治)

東原 徹 (ひがしはら・とおる) 1917～2008

1917(大正6)年5月27日長野県上諏訪町に生まれる。1924年に一家で上京し、東京・武蔵野町(現・武蔵野市)に住居を置く。1929年、東京高等商工学校に入学。1930年に来日中であった父の友人高希瞬(南京美術専科学学校校長)に1年間南画の指導を受け、「墨林」の雅号を得る。1931年に居仁洞画塾の野田九浦に師事し、日本画を学び、6月には東京高等商工学校を中退する。その後、1933年に帝国美術学校の日本画科(別科)に入学。金原省吾に師事。1936年卒業し、翌年、東京宝塚劇場芸芸部に入社。その後、1938年に美術学校同期の塩出英雄らと設立した「早旦会」や他のグループ展、個展で作品を発表し、野田九浦の言葉「周囲に束縛されないう我儘な自由の画」に表現されているような独自の画風を切り拓く。1939年からはエノケン(榎本健一)劇団等の舞台設計や背景画などを多く手掛け、舞台美術の分野でも活躍した。1946年には東宝の演劇・デザイン室長に就任し、1949年に演劇部が解散するまで勤める。1948年には帝国美術学校が武蔵野美術学校(現・武蔵野美術大学)と改称し、その教授に就任、1958年まで勤める。「煌土社展」等グループ展や個展に作品を発表しながら、武蔵野市文化会議委員・武蔵野美術協会会長などを歴任。紺綬褒章受章。2008(平成20)年3月31日に逝去。版画制作では、東京吉祥寺の「朴の会」が発行した版画集『むさしの風景』其の1(1938.11)に《月窓寺》を発表。朴の会は吉祥寺駅前通りにあった「志村書店」の店主志村浩主宰の版画の団体である。年賀状の交換会から始まり、年賀状作品展を開催し、版画集『むさしの風景』の発行に到った。出品者には版画家の織田一磨をはじめ、日本画家の塩出英雄、児童文学作家の柴野民三など、美術や文学などの文化人が多く含まれている。なお、『むさしの風景』其の2の発行は確認しているが、内容は不明。『東原徹作品集』(東原徹 1998)を上

梓している。【文献】『むさしの風景』1(1938.11)／『年譜』『東原徹日本画展 異彩をはなつ幽玄の世界』展図録(武蔵野市 2001 会場:武蔵野市民文化会館)(加治)

樋口富麻呂 (ひぐち・とみまる) 1898～1981

1898(明治31)年3月1日大阪市高麗橋に生まれる。本名は秀夫。「富富」とも号した。父元四郎は木版彫師で、『大阪新報』木版部在籍時代に北野恒富を絵師として招き、恒富が売れっ子の挿絵画家となるに力のあった人物。富麻呂はその縁で1910年に恒富の内弟子となった。1915年の第9回文展に《つやさん》が初入選、以後第1～3回帝展(1919～1921)に連続入選するなど高評を得た。1923年より院展に転じて入選を重ねるが、1926年頃京都に移って京都市立絵画専門学校に入り、1935年選科を卒業。同時に西山翠嶂に師事して官展に復帰した。戦後も日展や院展で活躍、長く美人を画題としたが、晩年は仏画を制作した。わずかながら版の仕事もあり、1916年に日本精版印刷合資会社が開催した第2回広告画図案懸賞募集において二等賞を獲得(第1回募集で一等賞を得たのが恒富)、これがサクラビールのポスター原画として採用された。ポスターを多く制作した師の姿勢を受け継ぎ、以後同社のほか月桂冠や富久娘のポスター下絵を手がけている。川柳雑誌『大大阪』の木版表紙の原画も描いている(彫師は山口比呂志)。ほかに芸艸堂より版行された《大原の春》《白川の秋》があり、版元不明の色紙判作品も数種知られるが、いずれも戦後の作と思われる。1981(昭和56)年11月7日京都市左京区で逝去。【文献】樋口富麻呂「今井治吉さんと恒富先生」『今井治吉先生追憶』(治友会 1962)／『日本美術年鑑』昭和57年版(東京国立文化財研究所 1984)／『没後70年 北野恒富展』図録(産経新聞社+あべのハルカス美術館 2017)(西山)

樋口芙蓉 (ひぐち・ほうよう)

1933(昭和8)年の第3回京都創作版画会展(1.10～11 京都・大丸)に木版画《行者詣》《亀の池》《宮島》他1点を出品。1935年頃は京都工芸協会会員。当時、京都市太秦組石町に住む。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府立総合資料館紀要』12(1984.3)／『日本美術年鑑 昭和十一年版』(美術日報社 1936.1)(三木)

彦山禎吉 (ひこやま・ていきち) 1884～1957

1884(明治17)年静岡県に生まれる。1901年渡米し、サンフランシスコの白人宅でハウスボーイとして働く。その後の職歴は不明だが、1919年頃から1925年頃までは、サンフランシスコ在住の社会主義者岡繁樹の家に寄寓し、岡の経営する印刷所を手伝っている(「聴取書(岡繁樹)」による)。画家を志した時期や経緯も不明であるが、1915年頃にはサンフランシスコ美術学校に学んでいたようである。現在確認される展覧会への初出品は遅く、1921年のサンフランシスコ美術協会展であるが、同年暮に結成された在米邦人とアメリカ人らによる美術団体「East West Art Society 東西美術協会」にも参加し、翌1922年の展覧会(サンフランシスコ美術館)に油彩画を出品した。その後、1926・27年に個展(サンフランシスコ・金門学園)を開催。また、1926年頃には美術団体「三原色画会」を結成し、1926・27年に展覧会(サンフランシスコ・金門学園)、1927年にロサンゼルス美術団体「Shaku-do-sha Association 赤銅社」(1920頃結成)との

合同展（サンフランシスコ・金門学園、ロサンゼルス・Central Art Gallery）を開催。1932年にはアメリカでの最後となった個展（サンフランシスコ・金門学園）を開催したが、旧作を含む73点の油彩画を出品している。版画は、1923年に自画・自刻による木版画集『黒炎』（『The Rising Sun』《Pines on the Shore》など全26図 未見）を発表。翌1924年には版画による個展（ロサンゼルス）を開催し、1925年のサンフランシスコ美術協会展にも木版画を出品。また、1926年に友人の清水暉吉が東京で発表した詩集『自画像』（5.20発行 主観社）の表紙絵・挿絵に、旧作の木版画《[男]》（表紙・木版を凸版して使用）《沈黙》《老人》《蒹草》《人魚》が使われた。清水はこれらの作品について、「この詩集に入れた木版画は、サンノゼに私が住むでゐた時、一所に暮し、一つ寝床にねた彦山禎吉君が、夜中になると気の向くまゝにほり刻むでくれたものだ。私は私の詩の感興を、下絵に描くと、彦山君がそれを土台にデザインをやり直して、徹夜して刻むでゐた。あの頃が思ひ出される。彦山君はその後木版に深い興味を持ち、版画集を公にし、米人間に知られるやうになった。今この挿絵の木版を手にして、私は彦山君を、そしてあの頃の自分を可懐しむ。〔中略〕こゝに入れなかつたものがまだ沢山ある。是非入れたかつたものも版が大きすぎたりして使ひ得ないのは残念だ。／表紙はやはり彦山君の木版を凸版にして使つた。私は遠く在米の彦山君に謝す」（『挿絵と装幀に就て』『自画像』所収）と解説しており、少なくとも木版画集が発表された1923年以前の、最初期（岡に関する聴取書を信じるならば1919年以前か）の作品であると考えられる。その後、1928年の第8回日本創作版画協会展にも木版画《Maun》が入選した。1933年に帰国し、東京に住む。帰国後の活動は不明であるが、1936年に岡が一時帰国した際、警視庁外事課に検挙され、起訴保留になったことがあるが、この時荒畑寒村と共に取り調べを受けている。戦後は、1951年の第3回日本アンデパンダン展に油彩画《レクリエーション》、第6回展（1954）に油彩画《黎明》を出品した。1957（昭和32）年東京都で逝去。【文献】『Asian American Art: a history, 1850-1970』（Stanford University Press 2008）／下嶋哲朗『サムライとカリフォルニア—異境の日本画家 小園千浦』（小学館 2000）／「聴取書（岡繁樹）」『特高警察関係資料集成』第6巻（荻野富士夫編 不二出版 1991）／『山田書店目録』96（2011.2）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『日本アンデパンダン展 全記録 1949 - 1963』（総美社 1993）／『アメリカに生きた日系人画家たち 希望と苦悩の半世紀 1896-1945』展図録（東京都庭園美術館 1995）（三木）

久泉共三（ひさいずみ・きょうぞう） 1899～1993

1899（明治32）年5月28日富山県高岡市に生まれる。市立定塚尋常小学校の時の同級生に筏井嘉一（後に歌人として知られる）がおり、影響を受ける。17歳の頃からメソジスト教会に通い始め、その頃油彩画を描いていた同い年の村井栄二（画号盈人）と知り合う。1916年上京、薬局の手伝いをしながら神学校入学を目指すも断念、上野下谷郵便局の臨時配達職員となる（同職場には三岸好太郎・小林喜一郎がいた）。郵便配達が縁で中川一政を知り、一政の勧めで本格的に絵を描き始める。その後高岡に戻り、改井徳寛・村井盈人・雄山通季と富山県で最初期の洋画団体「北国洋画協会」を結成、1921年高岡市で第1回展を開催する。郷里に戻った久泉を一政の推薦

で洋画家小林和作が支援することとなり、再び上京、小林邸に寄寓。1922年宮田重雄・小林喜一郎・益田義信らと「桃源会」を結成し、日本橋丸善書店ギャラリーで展覧会を開催する。また同年設立の春陽会第1回展に一政の勧めで油彩画を出品し、《伏木港風景》ほか4点が初入選、第1回春陽会賞を受賞する。同じく同展に入選した二人の女性画家のひとり「安藤すま」とその後結婚（もうひとは三岸節子）。以降第2～6・9・14回展（1924～1928・1931・1936）に出品、第4回展（1926）より無鑑査、1930年会友となる（1939退会）。この間、1926年に春陽会の仲間、横堀角次郎・土屋義郎と3人で創作木版頒布会を企画（但し頒布作品は未見）。また版画誌『版画』を創刊（版画社 1927.1）、野村俊彦刻・摺による多色木版《静物》1点を掲載する。同誌について確認できるのは創刊号のみだが、加治幸子『創作版画誌の系譜』によると、3号まで刊行の可能性もあり、以降の制作も考えられる。因みに、久泉の回想（「資料—私のこと」久泉共三）によると、一政を初めて訪れた際、自身の油彩画2点と友人村井盈人の版画を持参し批評を受けたとあり、村井も在京時代（1917～1921頃）に版画を制作していたようだが、未確認。その後1931年高岡市に戻り、1938年以降は富山市に居を定め、1941年「富山洋画協会」を設立・主催する。戦後は1946年富山県美術展覧会（県展）創設に関わり審査員を務めるなど晩年まで富山の美術振興に尽力した。1975年富山市文化功労賞受賞。1991年高岡市美術館において、「高岡近代洋画の先覚者たち（郷土の美術「近代洋画の歩み」シリーズ2 改井徳寛・村井盈人・雄山通季・久泉共三）」展が開催された。1993（平成5）年11月5日富山市で逝去。元富山県立近代美術館副館長・高岡市美術館館長で歌人の久泉迪雄は長男。【文献】『アトリエ』3-12（1926.12）・4-5（1927.5）／『中央美術』13-3（1927.3）／久泉共三「私のこと」・久泉迪雄「久泉恭三・すま 略年譜」『美のこころ 美のかたち』（桂書房 2014）／『創作版画誌の系譜』（樋口）

久富季人（ひさとみ・すえひと）

1933（昭和8）年に開かれた西田武雄の日本エッチング研究所主催第1回エッチング講習会（1933.8.1～3 同研究所）に参加。『エッチング』10号（1933.8）にエッチング《風景》が掲載されている。また、『エッチング』12号（1933.10）によると、同号から同誌の購読者となり、当時の住所は「世田ヶ谷区北澤3-1056」。更に『エッチング』22号（1934.8）では研究所製エッチングプレス機の所有者欄に名を連ね、職業「熊本洋画家」とあることから、1934年頃に熊本に移住したものと思われる。1936年8月頃に岡崎孝・永田珠一・林田信幸と4人で「内牧エッチング協会」を設立し、熊本県阿蘇郡内牧町の自宅を事務局としてエッチング講習会などを開催している。【文献】『エッチング』10・12・22・47（樋口）

美 稲（びとう）➡山田美稲（やまだ・びとう）

尾藤越山（びとう・えつざん）

戦前、行軍風景を描いた《[南昌へ]》や裸婦を描いた《[萬謝]》などのエッチング葉書（武藤完一宛）の制作がある。【文献】「武藤完一コレクション」（樋口）

尾藤武夫（びとう・たけお）

愛知県に生まれる。旧姓は伊藤。1916（大正5）年東京

美術学校図画師範科に入学。1919年同校を卒業。画号は越山。1921年から1939年まで山口県宇部高等女学校の図画教師として勤務。1934年の夏、大分県師範学校の図画教師武藤完一は講師に西田武雄を招いて、エッチング講習会(8.1～5 参加者32名)を開催(『エッチング』22 1934.8)。尾藤はこの講習会に参加し、生徒への指導を行うために学校でプレス機を購入。それらの事情を「女学校のエッチング」と題して小文にまとめ、自身の木を描いた銅版画や生徒の銅版画・感想文と共に日本エッチング研究所の西田に送った。それらは研究所機関誌『エッチング』第50号(1936.12)に掲載されている。なお、『同窓生名簿 東京美術学校 東京芸術大学美術学部 東京芸術大学大学院美術研究科 昭和47年版』では「歿」との記載がある。【文献】『エッチング』22・24・50 / 『同窓生名簿 東京美術学校 東京芸術大学美術学部 東京芸術大学大学院美術研究科 昭和47年版』(1972.12) / 『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第二巻』(ぎょうせい 1992) / 金子一夫編『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究報告書 第2部 滋賀県～在外学校』(金子一夫 2016) (加治)

日向 裕 (ひなた・ゆたか) 1912～1974

1912(大正元)年9月13日長野県南佐久郡青沼村に生まれる。1931年長野県立野沢中学校を卒業。上京し、川端画学校に学ぶ。1933年東京美術学校油画科予科に入学。本科では南薫造教室に学ぶ。1936年には同級生の石原壽市・加藤太郎・杉原正巳らと「臨時版画教室」(前年開設)に席を置き、平塚運一から木版の指導を受けた。また、同年(1936)萩原英雄・石原・加藤・杉原らと油彩画の研究会「啞地社」を結成し、展覧会を開催。翌1937年には石原・加藤・杉原・杉直直・若松公一郎らとシュールレアリスム傾向のグループ「貌」を結成。1939年かけて4回の展覧会を開催し、同人誌『JEUX D' ESPRIT』(1938.4～1939.4 8冊か)を発行した。1938年に卒業し、油画科研究科に進む。1940年研究科を修了。長野県立木曾中学校と木曾高等女学校の美術教師となるも数年で退職。1942年再上京。成城中学校に勤務しながら、制作活動を行い、同年の第11回日本版画協会展に木版画《あやめ》が入選。翌1943年の第18回国画会展に油彩画《溪谷》《子供》が初入選。翌年の第19回展にも油彩画《幼き子》が入選した。1944年応召。終戦後は郷里で制作を再開し、国画会展を中心に作品を発表。第20回展(1946)と第23回展(1949)で国画会奨励賞を受賞し、1949年国画会会員となった。1974(昭和49)年6月26日長野県南佐久郡白田町で逝去。【文献】『グループ<貌>とその時代』展図録(郡山市立美術館 2000) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) / 『日本美術年鑑』昭和49・50年版(東京国立文化財研究所 1976) (三木)

日野きよ (ひの・きよ)

1937(昭和12)年に東京の城東小学校で開催された日本橋区教育会主催による木版画講習会(11.25～29 講師:平塚運一)に参加。講習会の記念に創刊された版画集『日本橋版画』講習会記念号(1937.12)に《西の市》、第2号(1938.1)に《花》を発表。教師対象の講習会だったことから、当時は日本橋教区の教職についていたと考えられる。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

比野隆保 (ひの・たかやす)

料治熊太は1930年に創作版画を中心として、詩・短歌・俳句の同人誌『白と黒』を創刊し、その後、第二次、第三次と併せて全59号に及ぶ版画同人誌としては異例の刊行を行った。創刊当初の編集同人は料治を中心に比野隆保を含めた5人であったが、実際は料治が一人で刊行の一切を取り仕切った。比野は創刊号(1930.2)に木版画《静物》と「童心寮雑詠」、第2号(1930.3)に《静物》と「童心寮雑詠 その後、ほか〔詩〕」、第3号(1930.5)に《石灰炉の跡》と短歌、第4号(1930.6)に《若草 鴉》と短歌、第5号(1930.7)にも《犬蓼》と短歌を発表。第6～12・14～16号(1930.9～1931.7)には短歌のみを発表している。日野は元来歌人であり、『白と黒』が創刊されるのを契機に版画を制作したものと考えられるが、詳細は不明。『白と黒』第1～5号までの4作品《いぬたで》《静物》《若草鴉》《石灰炉の跡》は、1930年に開催された「第二回童土社絵画展覧会」(10.11～13 静岡・田中屋襦衣店)に出品されている。【文献】「第二回童土社絵画展覧会」目録 / 『創作版画誌の系譜』(加治)

日野武彦 (ひの・たけひこ)

長野県須坂では小林朝治を中心に、1933年に平塚運一を講師に招いて開催した「版画及び図画講習会」(会場:須坂小学校)を契機に版画同人誌『櫟』を創刊。その『櫟』第1輯(1933.8)に《葉鶏頭》を発表する。【文献】『須坂版画美術館 収藏品目録2 版画同人誌「櫟」』(臥竜山風景版画集』(須坂版画美術館 1999) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

日野道雄 (ひの・みちお)

1932(昭和7)年の第5回プロレタリア美術大展覧会(11.18～27 東京自治会館)に版画《渡政肖像》、日本画《プロレタリア文化の夕》、ポスター《一九二六年より一九三二年までの日本に於ける失業に關する統計》を出品。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) (三木)

日比松三郎 (ひび・まつさぶろう) 1886～1947

1886(明治19)年滋賀県坂田郡近江に生まれる。ジョージ・M・ヒビ(George・M・Hibi)としても知られる。1905年京都法政学校(現・立命館大学)に学び、1906年アメリカ西海岸のシアトルに渡る。同地で日米新聞に政治漫画などを寄稿。1919年サンフランシスコに移り、カリフォルニア美術専門学校に学ぶ。この頃日本画家・小圃千浦と知り合い、1921年在米邦人とアメリカ人らによる美術団体「East West Art Society 東西美術協会」設立に参加、第1回展(1922.3)、第2回展(1922.11)に小圃・彦山禎吉・幸徳死影(本名幸衛)・上山鳥城雄などとともに出品する。また1930年までカリフォルニア美術専門学校にとどまり、後進の指導にもあたる。1930年同校学生だった久子(福井県生まれ、旧姓「清水」1907～1991)と結婚。カリフォルニア州ヘイワードに移り住んで美術や日本語を教えていたが、1941年の日米開戦により、1942年カリフォルニア州サンタフェ集合センターに収容され、小圃・ミネ大久保らと同センター内に「タンフォラン収容所美術学校」を開設し展覧会などを開催。その後ユタ州トパーズに1945年まで抑留され、同所においても小圃らと「トパーズ美術学校」を開設し指導にあたった。1945年収容所解放後はニューヨークに移るが、1947(昭

和 22) 年同地で逝去。トパース収容所時代(1943～45 頃)に、収容所の風景や生活を描いたモノタイプ《無題(食堂の行列)》《無題(監視塔とコヨーテ)》《無題(監視塔と鉄条網)》《冬のトパース》《トパースの曲がり角》《戦争》などがある。【文献】『アメリカに生きた日系人画家たち希望と苦悩の半世紀 1896 - 1945』展図録(東京都庭園美術館 1995) / 下嶋哲朗『サムライとカリフォルニア - 異境の日本画家 小園千浦』(小学館 2000) (樋口)

日比野耕喬(ひびの・こうきょう)

大阪で武田新太郎・北村今三・前田藤四郎らが中心となって発行した版画誌『黄楊』の創刊号(1933.8)に《金魚》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

美 宝(びほう)

大正初頃に版元・滑稽堂秋山武右衛門(東京・日本橋)より木版画《東すがた》12 図の刊行がある(『滑稽堂』美術木版画出版目録 1918.11)。【文献】永田生慈『資料による 近代浮世絵事情』(三彩社 1992) (樋口)

美 邦(びほう) → 広瀬美邦(ひろせ・びほう)

飛矢崎和彦(ひやざき・かずひこ) 1924～没年不詳

1924(大正 13)年 7 月 1 日長野県上水内郡豊野町(現・長野市)に生まれる。1939 年長野県師範学校一部に入学し、2 年に在学中、同校生徒による版画誌『樹水』第 3 号(1941)に木版画《石膏写生》を発表する。1944 年 9 月同校を卒業、学徒動員で陸軍に入隊。終戦後は県内の小・中学校の教員として勤務。1950 年県派遣の留学生として東京藝術大学に在学中、日展に初入選し、翌年には一水会展にも入選する。教師を勤めながら、長野美術研究会や信州美術会の会員となり、1972 年には長野美術研究会会長、1976 年には長野県美術教育研究会の会長を歴任。1955 年以降は中央の美術展への出品をやめる。1983 年に退職し、その後は高等学校や短大の講師を勤める。1986 年に長野県民文化会館においてはじめての個展を開催(作品 120 点)。1995 年には『飛矢崎和彦画集』を上梓する。【文献】『樹水』3 / 「年譜」『飛矢崎和彦画集』(飛矢崎和彦画集刊行会 1995) (加治)

飛矢崎真守(ひやざき・まもる) 1922 頃～2012 頃

1922(大正 11)年頃、長野県下伊那郡大下条村に生まれる。長野県師範学校一部 2 年に在学中、同校生徒による版画誌『樹水』第 1 号(1938)に《林檎屋》、第 2 号皇紀 2600 年版(1940)に《戦友》、第 3 号(1941)に《手》を発表。1942 年同校を卒業。1950 年当時は更級郡下米鉦中学校に勤務しており、戸倉上山田中学校を最後に退職。教師をしながら、戸倉上山田などの風景を油彩で描いていた。2012(平成 24)年頃 90 歳で逝去。【文献】『卒業生名簿 昭和 25 年』(信州大学教育学部本校 1950) / ネット検索「長野からボンジョルノ 恩師飛矢崎真守先生」(2014・2016) (加治)

礮田哲夫(ひょうだ・てつお)

北海道名寄中学 3 年生在学中の 1940 年、西田武雄主宰の日本エッチング研究所の機関誌『エッチング』第 91 号(1940.6)にセルロイド版の作品が掲載されている。当時、名寄中学校には版画教育に熱心な教員の松田操がおり、松田は自ら版画制作を行う一方で、図画教育の一環とし

て生徒にエッチング技法の指導を行った。礮田ら生徒は松田の教えを受け、セルロイドを使って作品を制作。掲載作品は松田が生徒の作品をエッチング研究所の西田に送ったもの。【文献】松田操「名寄講習日記」『エッチング』70(1938.8) / 『エッチング』91(加治)

平井樺仙(ひらい・ばいせん) 1889～1969

1889(明治 22)年 1 月 5 日京都市に生まれる。本名は秀三。1906 年京都市立美術工芸学校絵画科を卒業、竹内栖鳳に師事。翌年の第 1 回文展に《宮苑ノ朝》が入選、1915(大正 4)年には《夏》で 2 等賞を受賞する。戦前は文展・帝展を中心に出品し、帝展審査委員となる。1910 年には入江波光・榊原紫峰等と「桃花会」を結成する。戦後は後援会(樺推会)のための作品を描き、画作三昧の生活を送る。複製版画と思われる多色摺り木版画《武蔵野の秋》(1921)がある。1969(昭和 44)年 8 月 30 日京都市で逝去。【文献】『20 世紀物故日本画事典』(美術年鑑社 1998) / 『山田書店新収目録』81(2008 春)(森)

平井房人(ひらい・ふさんど) 1903～1960

1903(明治 36)年福岡県八女郡福島町岩崎に生まれる。福岡県立八女中学校を卒業。画家を目指し、1920 年頃上京。1923 年の第 4 回中央美術展に洋画《運動場》が初入選。その間、1921 年から 22 年にかけては絵葉書図案の仕事を手掛けていた。その後、同年(1923)関東大震災に遭遇し、関西(神戸、後に京都)へ移住。年末までには宝塚少女歌劇団に勤めている。宝塚では美術部に所属。機関誌『歌劇』の編集部員として、表紙絵・挿絵などを描くだけでなく、エッセーなどを執筆したほか、舞台台本・公演ポスター制作なども手掛け、その多彩ぶりを発揮した。版の仕事としては、1929 年頃から翌年にかけて宝塚歌劇の演目をモチーフにした 40 種を超える木版による絵封筒を制作している。また、宝塚以外の活動としては、1930 年の第 5 回一九三〇年協会展に油彩画《黒い帽子の顔》が入選。1938 年には大阪朝日新聞に 3 コマの漫画「思ひつき夫人」を連載。この漫画は人気を呼び、単行本『家庭報国 思ひつき夫人』(第 1・2 集 = 1938、第 3 集 = 1939 朝日新聞社)として刊行され、1938 年末には宝塚歌劇団で舞台化、翌年には東宝で映画化された。この他、時期は不明であるが関西の漫画家たちと「オオサカ漫画グループ」を創立している。戦後は、宝塚歌劇団の囑託として勤務の傍ら、秋田實に協力して「宝塚新芸座」を創設。漫才やコントの台本などを手掛けたほか、数多くの漫画の仕事もこなし、雑誌に挿絵と散文を寄稿したという。1960(昭和 35)年 7 月 17 日京都市で逝去。【文献】富田章「平井房人の仕事について一戦前期の活動を中心に」『サントリー美術館 サントリーミュージアム [天保山] 合同研究紀要 二〇〇四』(第 1 号)(サントリーミュージアム [天保山] 2004) / 『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) (三木)

平岡 功(ひらおか・いさお)

出身地など詳細不明。1926(大正 15)年 5 月開催の「理想大展覧会」出品目録によると、同展覧会に《歴史と人生》(彫刻)、《をどり》(種別不明)、《人生に於ける最初の受難者の像》(構成品)を出品し、肩書が「詩人」、住所が「東京市外渋谷町下渋谷 639」と記載されている。また、同年 10 月発行の野獣群美術号『構成派』創刊号(有泉讓、阿部貞夫編集)に青色刷のリノカット(?)《サロメと若き

シリヤ人)と墨刷りのリノカット(?)《厳かな鬱積》(裏表紙に貼りこみ)を制作して掲載した。【文献】『大正期新興美術資料集成』(国書刊行会 2006) / 『創作版画誌の系譜』(滝沢)

平岡権八郎(ひらおか・ごんぱちろう) 1883～1943

1883(明治16)年3月3日東京に生まれる。竹川町で花月楼を経営する伯父広高の養子となる。白馬会研究所で学び、1910年第4回文展に油彩画《コック場》を出品し、3等賞を受賞。1917(大正6)年第11回文展に《大隅氏の肖像》で特選となる。1937(昭和12)年新文展出品《老給仕たち》が注目される。光風会に所属し、文展・帝展等を中心に出品。1910年『白刀』第1号裏表紙に石版図版を掲載。1911年吉井勇『戯曲集 午後三時』(東雲堂書店)の口絵《自由劇場第四回試演》、『大阪時事新報』1912年正月絵附録《婦人像》(多色石版)の原画、1913年には三越呉服店の多色石版ポスター《上代美人》の原画を描いている。また和田三造・太田三郎・辻永らと共に『東西図案大成』(大隅為三編、東西図案研究会 1932～34)編集に関わっている。画作の傍ら、1911年には松山省三と共に京橋区日吉町にカフェ・プランタンを開店したり、家業の料亭花月楼を経営し、新橋演舞場取締役を務める。1943(昭和18)年1月6日東京で逝去。【文献】『日本美術年鑑』昭和19・20・21年版(国立博物館 1949) / 『創作版画誌の系譜』(森)

平賀亀祐(ひらが・かめすけ) 1889～1971

1889(明治22)年9月25日三重県志摩郡片田村の漁師の家に生まれる。画家を志して1906年移民として渡米。各地を転々と労働した後、サンフランシスコ美術学校に入学し、1914年に卒業する。1916年ロサンゼルスに移転し漁師等の仕事をした後、1925年パリに留学し、アカデミー・ジュリアンに学ぶと共に、パリに定住する。翌26年にはル・サロンに入選し、以後ル・サロンを中心に出品する。戦前に銅版画《水鳥》(1931)や《ブリタニーの草屋》等を制作しているが、その実態は不詳。1955年日本に一時帰国し、ブリヂストン美術館等で個展を開催、また松方コレクションの日本返還に尽力する。1971(昭和46)年11月5日パリで逝去。【文献】『アメリカに生きた日本人画家たち 希望と苦悩の半世紀 1896～1945』展図録(東京都庭園美術館 1995)(森)

平川清蔵(ひらかわ・せいぞう) 1896～1964

1896(明治29)年12月27日広島県尾道町(現・尾道市)久保町に生まれる。尋常小学校を卒業後、大阪の印刷所に就職。同地で橋本健三に木口木版を学び、版画家を志したという。1920年日本創作版画協会第2回展に《七面坂上》《日本橋》が初入選(以後第8回展まで連続出品、8回展では「会友」)。1921年『版画』(小泉癸巳男編)創刊号に「版展所感」を寄せ、木版画《花》を発表。同誌には3号まで作品掲載があり、続く『詩と版画』でも第2輯に《をんな》《並木路》の掲載がある。1922年2月、神戸弦月会による創作版画展に出品、木版によるポスターも制作。同地においては神戸版画の家が発行した『HANGA』に参加(第1・5～8・11輯)、版画の家では作品頒布会も試みている。版画だけでなく彫塑にも興味を抱き、1924年に戸張孤雁に師事するため上京。1927年春陽会第5回展に《朝風呂》で初入選(第6・9回展でも入選)、1929年には第10回帝展に《麴町風景》で初入選

を果たす。1931年の日本版画協会第1回展に「会員」として《牛と男》《馬と馬子》《風景(旧作)》《自画像》を出品、第2回展にも恩地孝四郎の「音楽作品による抒情」シリーズに触発された意欲作《抒情ドウボルザーク「ユモレスク」》など5点を出品している。作風は時に荒々しく時にシュールで、強烈な印象を残すものが多く、またレンパツを駆使した木口作品を手がけたことも特筆すべきであろう。1932年には帝展入選作《麴町風景》を含む木口作品8点を『小品版画集』としてまとめている。『みづゑ』355号(1934.9)の表紙を飾った《風景》も木口作品であった。『小品版画集』を版行した1932年には版画誌にもしばしば登場しており、『白と黒』(第22・25号)や『版芸術』(第1～4・9号)に参加、『版芸術』第5号では恩地孝四郎《新膚》の摺りも手がけている。1935年、ホクト社に版画を出品していた縁から、玉村方久斗が中心となって結成された「新興美術家協会」に参加。10月発行の『N.A.S. 出品型録』には、旧作《ユモレスク》のほか、同会展で発表されたと思われる《プール》《月光》《照明》の写真が掲載され、抽象造型に近い斬新な構成を見せて興味深い。とはいえ出品歴が判明するのはこの時期までで、現存する最後の作品は、新興美術家協会第1回展に出品した《裸婦》とされる。『浮世絵芸術』4巻4号(1935.4)に寄稿した「わが版画によるせて」では、以後は板目木版に専心したいと述べているが、1939年には日本版画協会を自然退会しており、版画制作から離れたと考えられる。戦後の1954年、渡邊木版美術画舗で川瀬巴水《鶴飼》ほか数点の彫りを手がけるも、1963年の『浮世絵芸術』第4号では「近年病気のため制作から遠ざかっている」と報じられた。1964(昭和39)年11月2日埼玉県北葛飾郡庄和町にて逝去。【文献】平川清蔵「わが版画に寄せて」『浮世絵芸術』44(1935.4) / 平川清蔵「もともと美術家の持つ仕事は」『NAS 出品型録』(新興美術家協会 1935.10) / 『日本の木口木版画：明治から今日まで』展図録(板橋区立美術館 1993.12) / 『版ニュース』2(特集・平川清蔵)(輝開 1994.5) / 『版の絵』5(特集「知られざる1930年代—谷中安規・平川清蔵を中心に」)(小野忠重版画館 1997.3) / 桑原規子「新興美術家協会の成立と消滅 1935-1943—玉村善之助、恩地孝四郎、小野忠重、伊藤熹朔の周辺—」『聖徳大学言語文化研究所 論叢』14(2007.2) / 『創作版画誌の系譜』(西山)

平澤 勇(ひらさわ・いさむ)

長野県須坂では小林朝治を中心に、1933年に平塚運一を講師に招いて開催した「版画及び図画講習会」(会場：須坂小学校)を契機に版画同人誌『櫟』を創刊する。その第6輯(1935.10)に《賀状》、第9輯(1936.4)に《賀状》を発表する。第6輯のあとがきにあたる「后記」には「平澤氏は徳島の新人」と紹介されている。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集」』(須坂版画美術館 1999) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

平田秋穂(ひらた・しゅうほ)

京都の日本画家。日本絵画協会第9回展(1900)に日本画《念》を出品。『とうか会』と題される7枚綴りの木版扇面冊子(山田芸仲堂 1907)に浅井忠・荻野一水・神坂雪佳・杉林古香・吉川雅喬・河原華月とともに1図の作品を制作。なお、「とうか会」とは浅井忠が主宰した図案研究会ともいわれているが、不詳。【文献】『山田書

店新収目録』35 (1998.12) / 『明治期美術展覧会出品目録』(中央公論美術出版 2005) / 『近代図案コレクション モダン模様—大正のデザイン—』(芸艸堂 2008) (樋口)

平田月方 (ひらた・つきかた)

大正時代の口絵画家。春陽堂発行の雑誌『新小説』(第2次)に掲載の「時雨降る夜」(18-12 1913)、「躡る中」(19-7 1914)に木版口絵を制作。水野年方門下とされるが、詳細は不明。【文献】山田奈々子『木版口絵総覧』(文生書院 2005) (樋口)

平塚 新 (ひらつか・あらた) 1922 ~

版画家平塚運一の長男として、1922(大正11)年4月30日に東京の滝野川上中里で生まれる。尋常小学校3年生の時に、平塚運一の個人雑誌『版画研究』第1号(1932.3)に木版扉絵を制作する。【文献】『木版画に捧げた102歳の生涯 平塚運一展』図録(東京ステーションギャラリー 2000) / 『創作版画誌の系譜』(樋口)

平塚運一 (ひらつか・うんいち) 1895 ~ 1997

恩地孝四郎と並ぶ、日本近代を代表する創作版画家である。作品数や展覧会出品歴、著作の数、講習会での指導歴などいずれもおびただしいが、ここでは戦中までの版画に関わる事項にしぼり、その概略を述べる。1895(明治28)年11月17日島根県松江市津田町の宮大工の家に生まれる。木と彫刻刀に囲まれた環境から幼時より木版を好み、小学生の時に木版でメンコを試みる。長じては『方寸』や『白樺』、『現代の洋画』などから自刻木版の魅力を知ったという。直接的な影響源としては、南薫造の《魚見》(平塚は『現代の洋画』で見たと書いているが、『美術新報』11巻3号の誤りであろう)や富本憲吉の『卓上』表紙をあげている(『啄木鳥回想』)。また竹久夢二にも大いに感化された。1913年の夏、松江で洋画講習会を開いた石井柏亭の手ほどきを受けて感激し、画家となる意志を固める。1915年上京して柏亭に入門、版画への志を伝えたとこ彫師伊上凡骨を紹介され、半年間内弟子となる。この修業が彫りの名手としての平塚の方向性を決めた。1916年第3回二科展に木版画《雨》《出雲ソリッコ舟》が初入選。翌年松江に戻り、1920年に再上京。『中央美術』や『美術月報』の記者として暮らしを立てながら制作を続け、1921年《赤土の山》で日本創作版画協会第3回展に初入選(以後も入選を続け、6回展からは会員として出品)。1922年一時松江に帰り、来松した織田一磨と石版研究所を設立。1923年日本創作版画協会第5回展の京都府立図書館での開催に協力。1924年、関東大震災に取材した『東京震災跡風景』12点をまとめ、神戸版画の家から出版。1926年には国画創作協会第5回展の第一部(日本画)に版画《兵営附近A》《兵営附近B》、第二部(洋画)に油彩画《世田ヶ谷風景》《木曾風景》が入選、以後も出品を続け、新樹社展を経て国画会でも第4回展より会友として出品を続ける。1930年絵画部会員となり、翌年の版画部新設に尽力。国画会では若き棟方志功に墨摺の良さを教え、最初期の奥入瀬の連作に導いたことも特筆すべきだろう。この間1928年に恩地孝四郎や前川千帆、川上澄生らとともに8名で卓上社を結成、第1回展に出品した「東京風景」を共通テーマとする8点が発端となり、名作『新東京百景』の刊行に至る(版元は創作版画倶楽部)。1930年から35年にかけては、求龍堂が出版した梅原龍三郎と安井曾太郎の木版作品の彫摺も手がけている。1931

年の日本版画協会設立に際しては常務委員となり、第1回展から会員として参加、戦中まで出品した。また1938年第2回新文展で《佐渡尖閣灣》を無鑑査出品、文部省戦時特別美術展まで出品を続けるなど、卓抜した技術と木版の美質に忠実な力強い構成により創作版画界の旗手として活躍した。展覧会と並行して創作版画誌にも数多く登場、『版画』(小泉癸巳男編 1921創刊)と『詩と版画』(旭正秀編 1922創刊)に始まり戦中に至る掲載作品は膨大な数にのぼる。試みに、加治幸子氏『創作版画誌の系譜』の「収録版画作家索引」からタイトルを拾ってみると36であり、これは川上澄生と並んで最も多く、全111タイトルの三割を超える。東京で編まれた主要な版画誌だけでなく、神戸や宇都宮・長野・静岡・大分・大阪・京都・青森・長崎と全国に渡り、上海にも及んだ。このうち1927年に創刊された『版』は前田政雄や畦地梅太郎ら平塚門下が制作したものであること、『版芸術』第10号(1933.1)は「平塚運一小品版画傑作集」であることのみ特記しておく。

以上のような作家としての華々しい活動のかたわら、多方面から創作版画の普及にも努める人であった。まずは、雑誌への寄稿や著書の出版を通じた技法の伝道がある。1927年の『版画の技法』(アルス)や1931年の『創作版画 木版 石版 エッチングの作り方』(共著 崇文堂)は反響を呼び、たとえば藤牧義夫は『版画の技法』を読んで木版画に着手している。著作では版画史にもふれて仏教版画や浮世絵版画の魅力や世に伝え、また日本の版画の起源としての中国の版本や、紙の問題にも言及している。1932年には個人誌『版画研究』も刊行した(1934年の第2号まで)。次に、日本各地で開催した講習会がある。自著『版画三昧』によれば、1928年から40年頃までに、愛知や京都・長野・大分など22か所を訪れて版画作りを指導している。講習会から新たな集いが生まれ、版画誌に結実するケースもあり、たとえば1928年12月に京都の山本画箋堂で開かれた講習会から翌年「京都創作版画会」が生まれ、1931年8月の大分での講習会から『彫りと摺り』が創刊され(1934年夏に再び開催された講習会を機に『九州版画』と改題されて続刊)、1933年に長野県の須坂で開かれた講習会から「信濃創作版画研究会」が発足し、『樸』が誕生している。そして、1935年には東京美術学校に開講した臨時版画教室の木版画部講師として招かれ、版画の概説と、日本及び西洋の木版彫摺の実技を講じた。ここからは、加藤太郎や杉原正巳・上野誠・北岡文雄らが巣立っている。さらに、戦中の1942年に一門を集めて「きつつき会」を結成、『きつつき版画集』を版行したほか、展覧会も開催している。

木版画のあらゆる彫摺に精通して板目・木口ともに手がけたが、80年に及ぶ長い版業は、前半の多色摺と1930年頃に始まり1950年代以降本格化する黒白の構成とに大別することができる。戦後の骨太な墨摺作品はアメリカを中心に海外でも人気が高まり、平塚自身も1962年に渡米、ワシントンに定住して異国の風物を題材にさらなる展開をうけたことは大いに評価できよう。風景を多く描くも、晩年になって裸婦をとりあげ新境地を見せている。1977年勲三等瑞宝章を受章、1991年長野県須坂市に平塚運一版画美術館がオープン。1995年に帰国、1997(平成9)年11月18日東京都新宿区で逝去した。あまたの版画家から「平塚先生」と慕われた、102年の生涯であった。【文献】平塚運一「自己回想」『エッチング』88 / 平塚運一『版画三昧』(推古書院 1949) / 『平塚運一版画集』(講談

社 1978) / 平塚運一「啄木鳥回想」『版画芸術』43 (1983.1) / 平塚運一『版画の国日本』(阿部出版 1993) / 『木版画に捧げた102歳の生涯-平塚運一展』(東日本鉄道文化財団 2000) / 『版画家・平塚運一の世界展: 版画三昧画業80余年の軌跡』(高浜市やきもの里かわら美術館 2003) / 『創作版画誌の系譜』(西山)

平塚美代(ひらつか・みよ)

1937年11月に東京の日本橋城東小学校で開催された日本橋区教育会主催による木版画講習会(25~29 講師: 平塚運一)に参加。講習会の記念として創刊された版画集『日本橋版画』創刊号(1937.12)に《風景》、第2号(1938.1)に《風景》を發表。教師対象の講習会だったことから、当時は東京市日本橋区で教職についていたと考えられる。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

平野清司(ひらの・きよじ)

1933(昭和8年)年当時、日本エッチング研究所を主宰する西田武雄は、東京市内の小学校教員を招き、実習を主としたエッチング座談会(『エッチング』7 1933.5)を開催。その第3回が1933年5月3日開かれ、東京の京橋尋常小学校教員として勤務していた平野も参加。直接西田からエッチングの描き方、腐食法、プレスの仕方などの説明を受けた。その後、平野の主催で同年6月3日研究所において京橋区の手工・図画教師を集めて「エッチング実習会」を開催。この時に制作したと思われる老木を描いた銅版画が研究所機関誌『エッチング』第8号(1933.6)に掲載されている。便利なセルロイドの加工法を理解し、応用して貰いたいと『図解セルロイド応用模型の作り方』(資文堂書店 1931)を上梓。【文献】『エッチング』7・8 (加治)

平野清吉(ひらの・せいきち)

富山県に生まれる。1931年東京美術学校漆工科に入学。在学中、1932年4月の第19回光風会展に木版画《ガード裏》が入選。また、7月の校友会主催第14回版画部展覧会に出品。1933年に図案科実技を1ヶ年兼修。1936年工芸科漆工部を卒業した。その後の活動は不明。1972年頃は浦和市鹿手袋に住む。【文献】伊藤伸子「東京美術学校校友会版画部 1928-1933」『日本近代の青春 創作版画の名品』図録(和歌山県立近代美術館・宇都宮美術館 2010) / 『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三卷』(ぎょうせい 1997) / 『第85回記念光風会目録集』(1999) / 『同窓生名簿 東京美術学校 東京芸術大学美術学部 東京芸術大学大学院美術研究科 昭和47年版』(1972.12) (三木)

平野白峰(ひらの・はくほう) 1879~1957

1879(明治12年)生まれ。生い立ちや画歴の詳細は不明だが、1933年9月の渡邊版画店『創作版画目録』によると、《浴後》(当時5円)、《対鏡》(当時7円)の2点が同店から出版されていることが判る。同目録に示された図版に《対鏡》が掲載されているが、この《対鏡》は、『おんなえ 近代美人版画全集』(阿部出版 2000)に掲載の《鏡の前》と題された作品と同じであり、両者に題名の混乱がある。また1935年4月出版の渡邊版画店『木版画目録』には、「京都在住の画家、幼少より浮世絵を主として古今の諸派を研究して独学三十余年、本年五十六歳、若返って美人画を上版す」と紹介されている。翌1936年には、

後ろ向きで立ち姿の日本女性を描いた渡邊版画店からの《夏姿(別府)》があり、版内年記に「昭和十一年夏」とある。この版画は米国オハイオ州トレド美術館での新版画展開催に向けての新作で彼の地で好評を博した。1957年(昭和32)年逝去。履歴は『おんなえ 近代美人版画全集』の「作家略歴」で紹介され、生年の「明治12年」と、没年の「昭和32年」が判ったがその出典は明かでない。なお、白峰の版画は現在5点が知られ、《浴後》は、『おんなえ 近代美人版画全集』に掲載の《湯上り》と同作品と推定、また『おんなえ 近代美人版画全集』に掲載の《鏡の前》と題した2点の内、画面の左に鏡台のある図が渡邊版画店目録での《対鏡》、もう1点の右に鏡台のある後ろ姿図が《鏡の前》で、さらに《若い女》(1936頃)、《夏姿(別府)》の5点である。【文献】「作家略歴」『おんなえ 近代美人版画全集』(阿部出版 2000) (岩切)

平野久一(ひらの・ひさいち)

守洞春が中心となって発行した飛騨高山の版画誌『版丞』第1号(1938)に《思案》を發表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

平林治芳(ひらばやし・はるよし)

長野県須坂では日本各地の版画同人誌に作品を發表していた小林朝治が中心となって1933年に「版画及び図画講習会」(須坂小学校 講師: 平塚運一)が開催され、それを契機に版画誌『櫟』(1933~1937)が創刊された。その第1輯(1933.8)に《村》、第2輯(1934)に《賀状》、第3輯(1934.7)に《風景》を發表。1937年10月30・31日に松本市松本商業学校で行われたエッチング講習会(講師: 西田武雄 出席者: 会員12名と生徒9名)にも参加している(『エッチング』61 1937.11)。1934年当時は更級郡塩崎小学校に勤務。1937年には松本女子師範附属小学校に勤務していた。【文献】『エッチング』61 / 『須坂版画美術館 収藏品目録2 版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集」』(須坂版画美術館 1999) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

平林文次(ひらばやし・ぶんじ)

長野県安曇地方の小学校教師たちは版画技術の研磨と会員の親睦をはかるために、教育者・版画家として活躍していた郷里の先輩武田新太郎を顧問に迎え、「黄樹社」を組織し、版画誌『黄樹』(1937~1938)を発行した。平林は会員にはなっていたものの版画の發表はしていない。当時、北安曇郡広沢小学校に勤務していた。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

平福百穂(ひらふく・ひやくすい) 1877~1933

1877(明治10)年12月28日秋田県仙北郡角館横町(現・仙北市角館町横町)に生まれる。本名は貞蔵。13歳頃から円山四条派の画家であった父・順蔵(号「穂庵」)に絵の手解きを受ける。1893年に上京し、翌年川端玉章の内弟子となり、川端画塾に寄寓する。塾生であった結城素明を知り、親交を深める。1897年には東京美術学校日本画科撰科に進み、川端教室に学ぶ。1899年に卒業し、帰郷。1900年に結城素明ら玉章門下生ら6人によって、自然主義を標榜する「无声会」結成に参加し、作品を發表する。1901年に再び上京し、素明宅に寄寓。同年新声社に入社し、雑誌『新声』に挿絵を描くようになるが、1903年には辞する。1902年東京美術学校西洋画科に再入学し、長

原孝太郎のもとで約1年間デッサンを学ぶ。1903年第5回内国勧業博覧会に《獵夫》を出品し褒状となる。同年、幸徳秋水の『平民新聞』にコマ絵を描く。1904年新潮社の文芸雑誌『新潮』の表紙絵を描く。またこの頃隆文館の書籍の装幀等も手掛ける。さらに有楽社の『手紙雑誌』の表紙絵・挿絵を鍋木清方らと交互に担当する。同年10月には、日露戦争従軍の素明に変わり『団々珍聞』に挿絵を描くようになる。同年11月からは、太平洋画会研究所夜間部でデッサンを学ぶ。翌年『月刊絵はがき』第三輯「陽炎」に、木版による《残雪》《連翹》《春雨》《鶴》《汐干》《象》の6図を所収。9月には美術文芸雑誌『平旦』が創刊され、小杉未醒・山本鼎・石井柏亭・石井鶴三らと挿絵を木版画・石版画で描く。1906年には犀東共著『不二一週』に石版・木版・写真版43図を掲載する。1907年国民新聞社に入社し、議会スケッチや写真修正を担当する（同社には22年間籍を置く）。1908年5月には石井柏亭の誘いで、美術文芸雑誌『方寸』（1907創刊）の同人となり、第2巻第4号（1908.5）から参加し、ジंक版・石版などの技法を用いて挿絵を描く一方、展評なども執筆するが、1910年には辞す。1909年には第3回文展に《アイヌ》を出品し、初入選。1911年『婦人之友』の表紙絵を6月号から開始し1930年まで毎月描く。1913年に国民美術協会の創立に参加し、1915年には同協会日本画評議員となる。同年、川端絵画研究所の評議員にもなる。1914年徳富蘇峰著・百穂画『山水随縁記』が刊行され、木版・石版・写真版等62図が挿入されている。翌1915年には川端龍子・小川芋銭・近藤浩一郎らと「珊瑚会」を結成し、更に翌1916年には結城素明・鍋木清方・松岡映丘・吉川靈華らと「金鈴社」を結成する（1922解散）。同年12月に漫画誌『トバエ』が創刊され同人となる。1917年には、中島重太郎の主宰する日本風景版画会から、木版画による『日本風景版画』（10集まで刊行、彫りは伊上凡骨、摺りは西村熊吉）が開始され、百穂は第3集『東北の部』を担当し、《塩竈》《松島》《平泉》《鳴子》《笠島》の5図を描く。百穂の一枚摺りの版画は本作品が唯一のものである。1922年第4回帝展審査員に任命される。1930年に帝国美術院会員に任命される。1932年1月に東京美術学校教授に任命される。1933年10月30日に秋田県横手市にて逝去。百穂は、日本画家としての足跡を残す一方、一枚摺の版画制作の他、雑誌・単行本の装幀・表紙絵・口絵・挿絵などに見られる木版・石版を駆使した印刷美術への成果の意義は大きい。但し、百穂の作品の基本は、原画をもとに、職人達（彫師、摺師、製版師）の術を介して制作されている。また、若くして伊藤左千夫や長塚節らとも交流を深め、自宅でアララギ歌会を開くなど、アララギ派歌人としての存在も忘れてはならない。自著に『日本洋画の曙光』（岩波書店 1930）がある。【文献】加藤昭作『評伝 平福百穂』（短歌新聞社 2002）（河野）

平山三郎（ひらやま・さぶろう）

1935年8月、大分県師範学校主催の創作版画講習会（1～5 講師：平塚運一・畦地梅太郎）に参加し、その時制作した作品《顔》は武藤完一が発行した版画誌『九州版画』第8号（1935.10）講習会記念号に掲載されている。また第9号（1936.1）には《少女》を発表。その後の作品発表はないが、『九州版画』の最終号となった第24号（1941.12）の会員名簿には別府市石垣校の教員として掲載されている。その間、1937年夏には別府市教育会主催で開催されたエッチング講習会（8.1～3 別府市北小学校 講師：西田

武雄 参加者28名）に参加（『エッチング』58 1937.8）。1937年当時は大分県南立石小学校に勤務。【文献】『エッチング』58／『創作版画誌の系譜』（加治）

鱒崎英朋（ひれざき・えいほう） 1880～1968

明治・大正・昭和の新聞・雑誌の挿絵画家として知られる。1880（明治13）年3月29日東京京橋区入船町に生れる。本名は太郎。1897年5月に、当時、『東京朝日新聞』所属の挿絵画家・右田年英（月岡芳年門下）のもとに入門し「英朋」の号をもらう。1901年には鍋木清方・池田輝方らと「烏合会」を結成し第1回展開催。1912年の第23回展まで毎回出品し、年英門下の逸材として知られた。1902年に春陽堂に入社し挿絵を担当するとともに、同社の『新小説』編集部員の記者としても活動し、尾崎紅葉・幸田露伴・泉鏡花らとも親しかった。1910年4月1日発行の『此花』（雅俗文庫）第4枝、「現今浮世絵師」欄の紹介には「師門 右田年英／俗称 鱒崎太郎／年齢 三十一（明治十三年生）／生地 東京芝／現在 東京市赤坂区丹後町百三番地」とある。美人風俗画を主とする挿絵では、清方好みと英朋好みと、人気を二分するほどの人気ぶりであった。烏合会以降は展覧会出品を行わず「挿絵」一筋であった。木版口絵では春陽堂からのものでは泉鏡花『続風流線』（1904）が、金尾文淵堂からのものでは柳川春葉『生さぬ仲』（1913）が代表作とされるが、他にも多くの木版彩色摺口絵を手がけて美人画でのファンが多かった。1916年には小唄・都都逸に挿絵を付した画集『うた姿』（平和出版）を刊行して好評を博した。多色摺木版画では、「新浮世絵美人合」（同刊行会会員頒布1924頃）シリーズで《四月・さくら》を担当。また、相撲の取組絵も得意で、明治末から大正の『朝日新聞』など新聞紙上を賑わした「きまり手」図は好評であった。後に栗島狭衣との共著『虚実変化 角觚（かくてい）画談』（1930 教学書房）がある。明治から大正期には『新小説』や『文芸倶楽部』、『婦人界』等で、大正以降は『娯楽世界』、『淑女画報』、『講談倶楽部』、『キング』等の挿絵で活躍した。1968（昭和43）年11月22日東京都で逝去。【文献】「人情本刊行会会員募集広告」（1924）／松本品子編『妖艶粹美 甦る天才絵師・鱒崎英朋の世界』（国書刊行会 2009）（岩切）

広川千代喜（ひろかわ・ちよき）

1931年8月に大分ではじめての版画講習会（3～7 大分県師範学校 講師：平塚運一 参加者29名）が創作版画倶楽部主催で開催された。開催を記念して武藤完一は版画誌『彫りと摺り』（1931～1933 8冊）を創刊。県内の教職についていた広川も講習会に参加し、第1号（1931.9）に《労働》、第2号（1931.11）に《野草》を発表する。また、大分県美育研究会（大分県師範学校内）が発行した『郷土図画』第1巻5号（1931.10）版画特集号には《大分無線電信局》が掲載されている。【文献】「創作版画講習会」『郷土図画』（1-5 1931.10）／池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1（2002.9）／『創作版画誌の系譜』（加治）

広川松五郎（ひろかわ・まつごろう） 1889～1952

染色家、図案家。1889（明治22）年1月30日新潟県三条町（現・三条市）の木綿織元の家生まれる。1909年東京美術学校図案科入学。美校の短歌の集いで高村豊周と出会い終生親交を続け、ともに工芸の近代化を模索し

た。「黒耀社」や「柱人社」、「装飾美術家協会」での活動を経て1926年に「无型」を結成。帝展における第四部(工芸部)の新設にも尽力し、昭和に入ってから官展でも活躍した。1935年「実在工芸美術会」結成、同年より東京美術学校教授。戦後も個性的な作品の発表を続け、斯界を牽引した。

大正から昭和の初めにかけて、装幀・挿画が中心ながら木版画を少なからず手がけている。広川はそもそも洋画を志し、早くも『方寸』で山本鼎の詩や文章、「小畫」に心酔したという(「鼎氏の片相」)。高村豊周は1910・11年頃広川が「ガラスの上に油絵具をパレットナイフで模様描きして和紙に押し込んだ版画」や木版画を試みていたと記し(「広川松五郎追憶」)、宇野浩二の文章にも、美校時代の広川が広島新太郎と同じ下宿で親しみながら版画と染織を研究していたとの記述がある(『回想の美術』)。当時広川は、西欧の新思潮を吸収し、文学や芸術の各ジャンルを幅広く捲き込んだ、美校生を中心とする前衛的な動きのただなかにあり、文芸雑誌『モザイク』とその展覧会、日本画家たちによる「行樹社」や「黒耀社」、工芸家を主とした「柱人社」などに積極的に参加している(既出の「広川松五郎追憶」によれば、珍しい一枚摺の木版画《火犬—ツァルトゥストラより》は柱人社第1回展の出品作である)。そうした動きのなかで、新鮮な表現手段のひとつとして木版画が選ばれたといえるだろう。残された作品は植物をモチーフとするものが多く、単色の図案的な構成が大半を占めるが、いずれも力強く生命感に満ちた、大正期らしい造形を見せている。創作版画誌への参加もあり、『詩と版画』第12輯(1925.7)や『白と黒』(第25~27・31・34・35・37~40・44~46・49号)、『版芸術』(第3・4・6・9・10・21号)に作例がある。また无型の機関誌『无型』や雑誌『工芸時代』、『みづゑ』にも木版によるナイーブな表紙を提供している。さらに、大正末から昭和にかけて30作以上を手がけた書籍の装幀にも多く木版を用い、代表的なものに与謝野晶子『感想集 愛の創作』(1923)や山内義雄『仏蘭西詩選』(1923)、白鳥省吾編『昭和詩選』(1927)、与謝野晶子『感想集 光る雲』(1928)などがある。美校時代に与謝野鉄幹・晶子に師事した縁から晶子の著書の装幀をいくつも手がけ、1930年に鉄幹と晶子が創刊した『冬柏』にも木版表紙を寄せている。1952(昭和27)年11月2日東京都練馬区で逝去。【文献】広川松五郎「鼎氏の片相」『アトリエ』44(1927.4)／宇野浩二『回想の美術』(東出版 1976)／『生誕110年記念 広川松五郎・高村豊周展』図録(新潟県立近代美術館 2000)／菊屋吉生「大正初期から中期における小団体、小グループの相関関係—行樹社と八火会を中心として」『大正期美術展覧会の研究』(東京文化財研究所 2005)／『創作版画誌の系譜』(西山)

広島新太郎(ひろしま・しんたろう) 1889~1951

1889(明治22)11月23日徳島県徳島市に生まれる。雅号は「晃甫」「混人」。師範学校教諭だった父の勤務地の関係で、上京するまでは徳島市・長崎市・福岡市・高松市などに住む。1907年香川県立工芸学校用器漆工科を卒業、東京美術学校日本画科予備科に入学する。1912年7月、3か月遅れで美校日本画科を卒業。在学中本科では最初下村観山の教室にいたが、寺崎広業・結城素明が担当する教室に移った。また1910年に川路柳虹・伊藤順三らと新しい美術を模索して「アブサント会」をつくり、座談会や展覧会を開催した。回覧雑誌を発行し、版画号

発行を計画していたともされる。この会の活動は、その後1912年5月創刊の雑誌『モザイク』に依る制作・発表活動へと展開。版画へも関心を示し、同年8月発行の1巻4号の裏表紙に石版画を制作して掲載している。さらに『モザイク』での活動を引き継ぎ、日本画の既成の枠組みを打ち破ろうとして新興の日本画研究団体「行樹社」を結成し、1913年11月に第1回展を開催した。こうした東京美術学校生・卒業生を中心とする活動の一方で、1913年9月、西条八十や日夏耿之介ら文学者と長谷川潔・永瀬義郎ら美術家の同人文芸美術雑誌『仮面』が主催する洋画展覧会(仮面社主催洋画展)に、洋画16点とともに5点の木版画《光り》《太陽》《太陽と豚》《日没》《しろい月》を出品した。その後も長谷川・永瀬と交流をつづけて版画を制作し、「日本版画倶楽部」を結成して1916年11月に第1回展を開催、11点の作品《太陽》《女》《太陽と月》《日没》《潮間》《母と子》《夜の茂み》《牛》《遙かなる世へ》《月の陰影》《空》を出品した。これらと仮面社主催洋画展の出品作品は現在1点も現存が確認できていないが、展覧会を見た関係者の回想によれば、「一面に赤い光の中に黒い猪が歩いて居る」、「独特な色と形と配置」(灰野庄平「広島君の『沈黙』」『中央美術』64)の版画、あるいは「まるい地平線をもった群青色の山脈とその上のぼら色の空を背景にして、裸体の女が青い猫の首をしめて立っている」(江口煥『わが文学半世紀』青木書店 1953)版画とされ、怪異で神秘的な内容の版画であったことがわかる。この後、1919年の日本創作版画協会第1回展に《燈火》《独唱》(大阪展は《風景》《独唱(露西亞音楽団)》《燈火》《暮景》)、1920年の第2回展に《草花》《赤い月》《夜泊船》(大阪展は《草花》《夜泊船》)を出品した。また1921年「広島晃甫作木版画頒布会」を興し、翌年にかけて《曲芸の女》《暮景(夕暮小景)》《岩上小禽》などの木版画を制作頒布している。これを機に版画制作を止めた。現存する広島の版画の多くは、この頒布会用に制作された作品と考えられる。こうした版画関連の活動の一方で、1919年の第1回帝展に出品した《青衣の女》が特選となり(京都会場での墨塗事件で被害にあい、翌年再制作)、翌1920年の第2回帝展でも特選を受賞、版画頒布会後は帝展・新文展を中心に日本画家として活動した。1930年ベルリンで開催される日本美術展覧会の委員としてヨーロッパを訪問、各地を旅行した(1932帰国)。1932年に山口蓬春、伊藤深水らと結成した「青々会」の日本画家としても活動している。1951年12月16日東京で逝去。【文献】森芳功「広島晃甫の画業 大正期個性表現の行く末」『近代画説』21(明治美術学会 2012)／森芳功「広島晃甫(新太郎)の版画作品」『徳島県立近代美術館紀要』16(2015)／『広島晃甫回顧展—近代日本画のもう一つの可能性』図録(徳島県立近代美術館 2017)(滝沢)

広瀬美邦(ひろせ・びほう)

明治末頃に版元大黒屋松木平吉(略して「大平」東京両国)から『美邦花鳥画帖』の刊行がある(『大黒屋松木平吉 図書目録』明治42年版)。【文献】永田生慈『資料による 近代浮世絵事情』(三彩社 1992)(樋口)

広瀬雄次郎(ひろせ・ゆうじろう)

1935年、大分県師範学校主催の創作版画講習会(81~5 講師:平塚運一・畦地梅太郎)に参加し、その時制作した作品《椿》は武藤完一が発行した版画誌『九州版画』

第8号(1935.10)講習会記念号に掲載されている。【文献】武藤隼人『版画家・武藤完一資料集(戦前篇Ⅰ)―作家年譜を中心にして―』(武藤隼人 2010)／『創作版画誌の系譜』(加治)

広 延 (ひろのぶ)

戦前に《越前岳》《大島之積薪》《ほたん》などの木版画を制作。1930年頃か。【文献】『浮世絵と現代版画』目録15(山田書店版画部 1986秋)(樋口)

